説教20210718 イザヤ57：14-21　マルコ6：30-44

「遠くにいても近くにいても」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

皆さん、主の祈りを思い出して下さい。その中に「われらの日用の糧を今日もお与えください」という祈りがありますが、果たしてここでいうわれらの範囲はどこまでをいうのでしょうか。このわれらに対する認識は、イエス様と私たちとでは大きくかけ離れています。すべての人々を救おうとされているイエス様にとってわれら、というのはすべての人たち、という意味ですが、私たちがわれら、と祈るときは、せいぜい自分の家族全員、とか教会の人々全員とか言った範囲に限られるのではないでしょうか。いや、失礼なことを言わないでください、私はイエス様から教えられた通り、イエス様と同じく、すべての人々を念頭において日々、「われらの日用の糧を今日もお与えください」と祈っていますよ、と力説されるかたもおられることでしょう。しかし、今日の聖書箇所のように、背に腹は代えられない状況が訪れた時に、そう祈れるかが、私たちの信仰の課題となると思います。

　今日の奇跡物語は、私たちの日常生活に近いところで行われたこととして特徴的です。5つのパンと2匹の魚、を弟子たちは自分たちの為に用意しておりましたが、その数を思いますと所帯じみていると言いますか、彼らの日々の暮らしがにじみ出ているようです。私たちも、スーパーに行って、まさに5きんのパンと2匹の魚を購入することもあることでしょう。イエス様の今日の奇跡は、弟子たちのこれくらい身近な発想のうちに、起こったのです。そしてその奇跡の内容というのも、例えば、パンがコメに変わったとか、魚が鶏肉にかえられたとかいうのではなく、ただその量が増やされたということです。確かに、量が増やされたのが、一瞬のうちに起こったことが、人間業ではないのですが、でも、時間と条件が与えられれば、これくらいの増産は、人間の手でもできるだろう、と思わせるような奇跡なのです。

　今日の奇跡は、イエス様が波を「静まれ」といってしかりつければたちまち静かになる、といった見るからに人間業でない奇跡なのではなくて、何か、人間の近くで行われている、人間と親和性がある奇跡といって良いでしょう。それは神による、人間に平和をもたらす奇跡、といっても良いかもしれません。

　さて、人間に近いところで行われた奇跡、といっても、それが弟子たちにとって、さして驚くべきことでなかった、というわけではありません。このパンの奇跡に対する弟子たちの驚きは、じわじわとそして、そこはかとなく訪れました。ちょっと種明かしをしますと、その驚きの全貌というのは今日の聖書箇所のちょっと後の、6章51節であらわになります。「弟子たちは心の中で非常に驚いた」とその時の弟子たちの心中が描写されています。そのことは来週の説教で取り上げますが、弟子たちが今日のパンの奇跡のすごさに気づき、驚かされるまでには、時間がかかったということです。大波をしずめる奇跡のような一瞬の驚きではなかったということです。私たちも、今日のイエス様のパンの奇跡を時間をかけて詳細に黙想していけば、そこはかとないイエス様に対する驚き、そしてそれに対する私たち人間の小ささにおそれいることでありましょう。

　さて今日の説教題は「遠くにいても近くにいても」でありますが、今日のマルコの箇所でいえば、大勢の群衆というのはイエス様から遠くにいる人であり、かたや、弟子たちはイエス様の近くにいる人であります。結局、遠くにいる群衆、そして近くにいる弟子たちの双方に、イエス様の恵みは分け与えられたのですが、それに至るまでの経緯は双方で随分と違います。群衆たちには、イエス様の恵みは、ただ恵みとしてシンプルに与えられましたが、弟子たちが恵みを受け取るまでには、弟子たちとイエス様との間で、実に一生忘れられない様な、深く心に刻まれる応答がなされたのです。

それはどんな応答だったのかを見て参りましょう。先ずイエス様は弟子たちに、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われます。それまで弟子たちはイエス様に遣わされて、あちこちで人々の間に立って福音を宣べ伝えており、もうくたくたになっていたのです。そして「出入りする人が多くて、食事をする暇もなかった」とも記されています。この様子ですとこの時の弟子たちの疲れと空腹とはハンパがなかったことでありましょう。その様な弟子たちの様子を気遣い、イエス様は「しばらく休むがよい、おつかれさま」とねぎらいの意味もこめて、弟子たちに声かけをされたのだと思います。イエス様を一人のリーダーだとしますと、実に理想的なリーダー像だと言えるでしょう。

　ところが、そこでイエス様にも弟子たちにも想定していなかったことが起こってしまいます。イエス様と弟子たちは、舟で湖上を「人里離れた所」へと向かったのですが、イエス様と離れたくない多くの群衆たちが陸路で歩いて、その「人里離れた所」へと先回りして押し寄せ、イエス様と弟子たちがその「人里離れた所」に舟でついてみれば、そこは「人里離れた所」であるどころか、多くの群衆でごった返している所となっていたのでした。

　私たちはイエス様の弟子たちのことを、時に聖人と呼んだりして、人格的にも優れていて、よくできた人たちだったという思い入れを抱いてしまいがちですが、彼らは必ずしもそうではなく、むしろ普通の人たちであり、感情豊かな素直な人々だったのではないでしょうか。大半の弟子たちは、自分たちが休もうと思っていたその岸辺が、多くの群衆でごった返しているのを見て、「おいおい、いい加減にしてくれ、私たちにも休みをくれ」などと心中でつぶやいていたのではないでしょうか。ところが、この時のイエス様の思いは弟子たちとは全く違いました。イエス様はある意味すごく自分勝手なこの群衆たちの姿を見て、、飼い主のいない羊のようだと思われて、彼らを深く憐れみ、そしていろいろと教え始められたというのです。

　このような背に腹は代えられない場面で、各自の真骨頂はあらわになるもので、イエス様はこういう時に、それこそ自然にみんなの為に「われらの日用の糧を今日もお与えください」と祈られる訳ですが、、私たちも、まさにこのような場面に遭遇した時、イエス様と同じようにすべての人の為に祈ることができるよう、導かれて行きたいと願います。

　さて、ここまででイエス様と私たち人間の本質的な違いがあらわになってきましたが、さらに続きを見てまいりましょう。

　弟子たちはこのときイエス様から「しばらく休むがよい」というお墨付きの言葉を得ていたものですから、もう頭の中は、休もう、休もう、ということでいっぱいだったに違いありません。珍しくイエス様が「しばらく休むがよい」と言われた手前もあるので、ここは休まなければ、かえって悪い、などと思ったかもしれません。でもイエスは、ひたすら群衆たちに向き合って、御言葉を教えておられるのです。そんなイエス様の姿にしびれを切らした弟子たちはついに、イエス様に「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買いに行くでしょう。」と進言をいたします。イエス様にモノ申すとはよほどしびれを切らしていたのでしょう。ついに言ってしまった、という感じかもしれません。

　その弟子たちの進言に対しイエス様は「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と答えられます。このイエス様の答えに、弟子たちの大半はいわば狐につままれた思いであったのではないでしょうか、唖然としてしまったのです。弟子たちにしてみれば、「すまんすまん、早く休みなさい」というイエス様のねぎらいの言葉を期待していた所に、逆にさらなる役目を言い渡された訳です。この世的にいえば実に理想的でないリーダー像であります。

　それから弟子たちとイエス様との間になされた会話を抜き出しててみましょう。

イエス様「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」

弟子たち「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」

イエス様「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」

弟子たち「五つあります。それに魚が二匹です。」

弟子たちはそれから、青草の上に組になって群衆たちと共に座らされ、そしてイエス様は五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配されたのでした。

自分たちの腹を満たすためにとっておいたこの五つのパンと二匹の魚が取り出され、大勢の前にさらされたとき、弟子たちはちょっと恥ずかしい思いをしたのではなかったでしょうか。しかし、このささやかな食料が、イエス様の祈りによって、その祈りの通りに、すべての人々の日用の糧として供えられたとき、弟子たちは、自分たちがその時、祈ることもしていたかったことに気づかされたのではないでしょうか。

イエス様は次々にパンを割いて弟子たちに渡されましたが、それを配る役目の弟子たちの心境はどのようであったでしょうか。この問いに模範的に答えるならば、弟子たちは、イエス様から与えられたこの役目に、喜んで献身して、われを忘れて、空腹のことなどもすっかり忘れて、喜んで、人々の為に奉仕したのだということになるでしょう。

　しかし、もうちょっと、この時の弟子たちの心中のことを思いめぐらすと、そんなにことを美化しただけで、語りつくせることでもないかもしれません。

　とにかく、今日弟子たちの身の周りに起こったことは、想定外の番狂わせの出来事の連続でした。イエス様から「休め」と言われていたのに、群衆がまた押し寄せてきて休めず、イエス様に「休みたい」と進言すれば、かえって「働きなさい」と言われます。さらに自分たちがとって置いたささやかな食料が、イエス様の祈りによって、大勢の人々の為の食料に変えられ、それを人々に配る役目を、言い渡される、といったような、日常的ではありますが、深く心に刻まれる様なやり取りが、弟子たちとイエス様との間で繰り広げられたのです。ですから、この日の弟子たちの心境は、いったい何なのか、どうなってしまっているのか、といった当惑した思いがその大半であったのではないでしょうか。

　私たちはこの当惑している弟子たちと、当惑させたイエス様の間柄に、かえって近さを感じることでしょう。この世の人間関係でもそれが近くなれば近くなるほど、新しい気づきと、それに伴う当惑、思い違いの機会も増えて来るものです。ただ最後にパンと魚を恵まれた群衆たちと比べますと、弟子たちとイエス様との近さは歴然としてくるでしょう。

 私たちはイエス様からの恵みをすべての人と分かち合いながら、同時にイエス様の近くにいることの思いがけない奇跡の数々を思い知るようになります。その驚くべきイエス様との日々を、私たちが遠くの人たちに告げ知らせていくことが出来ますように、と祈ります。

祈ります

天の父

私たちは時として、あなたからの恵みに背を向け、自分たちの安逸にさまよってしまう愚かなものです。どうかそのような私たちを、御手を持って慰め、悔い改めさせ、あなたの為に働くものへとならしめて下さい。

時として、祈ることが出来なくなくなる、私たちに、唇の実りを与え、御子に倣って祈ることができるようにしてください。私たちが、ただ近くの者たちだけの平和にとどまらず、あなたの平和を、遠くの者たちへも告げ知らせて行くことが出来ますように。

今、世界中が、洪水や疫病、紛争や対立に、傷つけられ苦しんでいます。どうかその苦しみ悲しむ隣人を覚え、私たちが祈っていくことが出来ますように。あなたの恵みのパンを全ての人が味わい受け取っていくことが出来ますよう、私たちをそのために豊かに用いてください。

父と聖霊とともに